



MINATO TOKYO

Bulletin

みなと
ユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/MITSUKO TAKAI PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03 (3434) 2233 発行人/高井光子

2015年9月1日発行 第141号

目次	
P1	巻頭言
P2-3	新入会員を囲む会
P4-6	国際理解講演会「戦後70年 歴史和解への道」
P6	ゆかた着付け体験教室
P7	アルバニアの家庭料理ワークショップ
P8-9	都立三田高校ユネスコ委員会の皆さん来室
P10-11	MUA サロン
P12	事務局便り / 編集後記

あの頃、この頃

港ユネスコ協会理事 清水軍治



昭和27年(1952年)大学へ進学した頃アコーディオンに出会った。その音色に魅せられ、独学でマスターして、以来60年。

プロ奏者にもなれずに、今日まで来てしまった。

あの頃・・・銀座にネオンの灯がともる頃、小さなクラブの店で、酔客の求めに応じてハヤリ歌を弾いていた。華やかなキャバレーの楽屋で、客からもらったチップをそのまま「坊や、ラーメンでも食べなさい」と私の手に握らせてくれたキレイなホステスのお姉さん。私は屋台のラーメンをすすりながら、彼女に恋をしてしまった。また、新宿、渋谷にあった歌声喫茶「カチューシャ」や「ともしび」にも出演した。

時が移り、エレクトーン等の電子オルガンが始め、プロのアコーディオン奏者が次つぎ、失職していった。もし、私がプロ奏者になっていたら、毎日の生活はドン底であったに違いない。

あの頃・・・昭和54年(1979年)、港区教育委員会から「ユネスコ協会設立準備に参加して欲しい。」との要請があった。参加したものの、故丹下健三初代会長、三輪公忠前会長などの間で小さくなって、ここは、私の「泳げる池」なのだろうか?と躊躇していた。

その後も、ディプロマツツ・レクチャー、国際シンポジウム等の英語を使う催しには出席できなかった。

世界の料理教室、新入会員を囲む会、みなと区民まつり、MUA サロン、UNESCO ユースフォーラムな

どには、自分なりに、楽しみながら参加してきた。

創立30周年記念特別事業「歌と踊りで世界をめぐる」で実行委員長をさせてもらったのが、私の副会長としての最後の「仕事」だった。プログラムには8団体が参加してくださった。

・・・インターナショナル・セカンダリー・スクール、東京インターナショナルスクール、「父と子のバグパイプ」、テンプル大学、ブルガリアの民謡と楽器演奏、韓国伝統舞踊、ラテンアメリカの歌と踊り、白門グリーンクラブの男声合唱。・・・

もう4年も前になるが、今も頭の中に、あの歌や踊りが、色鮮やかに蘇ってくる。参加団体を紹介し、運営に参加して下さった皆様に感謝で一杯だ。

長い間、常任理事会では「言うは易し、実行は成り難しだ」と、喧々諤々話し合ってきた。あの頃のことには懐かしく思うが、少しずつ遠くなってきた。

ボランティア団体、国際交流団体が林立する中で、これからの協会はユネスコ精神を守りながらの、特色ある活動にあると思う。時の流れは速く、時勢の変化も速く、対応が大変だろうと思う。どうぞ、会長を中心に、役員や会員の皆様、頑張って下さい。

今日この頃・・・高齢者施設への慰問や、依頼を受けての歌声喫茶での伴奏と司会に時間を過ごしている。83歳ながら元気で、アコーディオンを弾きながら、殆どが70歳代の方がたと一緒に、大きな声で歌う喜びを共有できる幸せに感謝しています。

これを、残された人生の生き甲斐としている。

“歌は世界共通の言葉” さあ、歌いましょう。

新入会員を囲む会

日時：2015年6月9日（火）18：30～21：00

会場：港区立生涯学習センター303室 / 港ユネスコ協会事務局



新しく会員になって下さった皆さんに、協会の活動に関心もっていただき、一緒に活動していただきたいとの願いから、年に1度この会を開催しています。今回は5名の新会員がご出席くださいました。

第1部 歓迎行事と8委員会の活動紹介 (303号室にて)

秋山雅代常任理事の進行により、滞りなく進みました。

◆ 高井光子会長の挨拶

ご入会いただき有難うございます。心から歓迎申し上げます。

当協会は、国際都市・港区ならではの国際理解・交流をすすめる活動と、国連のユネスコ憲章に謳われている理念に則って、平和な地球社会をつくり、人類の幸福の実現を目指すユネスコ活動という、2本の柱を意識しながら活動しています。生き生きとした魅力的な協会であり続けるために、新しい会員の皆さまのご参加、ご協力が欠かせません。いろいろな方がたと出会い、一緒に活動することで、世界や地域社会のために貢献していただき、それが、ひいてはご自身の視野を広げることに役立つと思います。

◆ 松本 洋 副会長の挨拶

まずは、参加を！！ 講演会などいろいろな催事があります。事務局や、活動に積極的に顔を出し、“Take Part”してください。何らかの役割をご自身で見つけて参加して欲しいと思います。

◆ 新入会員のお名前紹介（敬称略）

有働巧、柏木亮、近藤佐織、坂本直子、吉原宏昌

◆ 8委員会の年間の事業計画と事業内容と、紹介者

◎文化体験教室委員会・・・平方一代 常任理事

3年前にできた新しい委員会です。港区らしい活動として、外国の方が参加しやすい、楽しい交流の場づくりとして、日本の文化を紹介しながら体験していただく機会を企画・運営しています。

「ゆかた着付け」そして「抹茶」「書道」とジャンルを増やし、毎回好評をいただいています。興味がおありでしたら、まずは見学していただき、次には企画、運営へ。ぜひ一緒に活動いたしましょう。新しい企画として「日本列島の民話、踊りシリーズ」を考え、その1回目として「沖縄の民話とエイサー」を今、準備中です。体験教室は、通常、土曜日の1時から、当港区立生涯学習センターや赤坂区民センターで開催します。

◎広報プレティン・インターネット委員会・・・棚橋征一 常任理事

協会が行っている活動の報告と記録、また、これからの予定などを知らせるために、紙の媒体として、年に4回季刊として和文、英文の2種類のプレティンを発行し、広報しています。このプレティンはホームページにも載せます。ホームページも担当しています。編集に興味がある方は是非入っていただきたいと願っています。

◎国際学術文化委員会（国際理解講演会、ディプロマツ レクチャー、シンポジウム）・・・宮下ゆかり 常任理事

委員会を、月1回、港ユネスコ協会の事務局で開いています。委員の皆さんがアイデアを出し合い、人脈をたどりながら、下記の3事業を企画し、運営しています。会員の皆さんの「やってみたい、聞いてみたい」の気持ちが大きなエネルギーとなります。

<国際理解講演会> 年に3回開催。近々の6月28日に、「戦後70年 歴史和解への道」という講演会を予定しています。昨年11月には、「ミクロネシアから考える・・・太平洋のなかの日本」という講演会を開きました。

<ディプロマツ・レクチャー> 駐日大使や大使館員を対象にして、クローズドの形で、年1度、開催しています。講師には英語で「今日の日本」に関するレクチャーをしてもらいます。

<シンポジウム> 年1度開催。今年の2月26日に前年度のシンポジウム「成熟都市へのみち～オリンピック・パラリンピックを超えて～」を終えました。時宜を得たテーマであり、好評をいただきました。

以上、活動の実例をお話ししました。興味ある方はぜひお仲間になって下さい。

◎語学研修委員会・・・友金 守 理事

<英会話初級教室> 年間3学期構成です。講師はアメリカ人 Mr.マーク・マドック。何時からでも参加可能です。一人でも多くの仲間に声を掛けていただいて、生徒さんを紹介ください！！授業料はリーズナブルです。

◎世界の料理委員会・・・今村孝子 常任理事

世界の食文化、世界の家庭料理を紹介するワークショップを企画・運営する委員会です。講師は外国人にお願いし、母国の紹介のあと、家庭料理と一緒に作り、食するという楽しい催しです。

いろいろな国の方と相互理解を深めるには「食」が一番の手がかりだと思います。講師には、日本にいらしたばかりの方、長く滞在されている方、大使館の方など、様々なご縁をたよりにお願いしています。年に3回、田町駅近くの「リーブラ」の2階にある料理室にて開催します。

◎みなと区民まつり委員会・・・北岡 修 委員長

年に1回開催する港区の区民まつりに参加しています。日頃の活動を区民の皆さんに紹介しながら、新たな仲間を勧誘します。ミニバザーも行います。今年は第34回を数え、10月10日(土)、11日(日)の2日間開催します。港区全体としての準備委員会が開かれ、年ごとのテーマを設定して、区の魅力を発信するお祭りです。

◎ユース活動委員会・・・高井光子 会長

大学生や青年の方々を中心となって活動する委員会です。かつては活発だったのですが、若者が減って眠っていました。再び、活性化したいと願って、6年前から「UNESCO ユースフォーラム in みなと」を始めました。

宇都宮市で留学生のお世話しておられる当協会の理事・長門 芳子さんのご協力により、宇都宮大学と作新学院大学の留学生約10名に上京してもらいます。東京側は、慶応大学ユネスコクラブ、玉川大学ユネスコクラブ、新宿ユ協などのユースにも企画・運営に関わってもらっています。フォーラムは、母国紹介、日本での生活や体験、将来の夢などをテーマにしたパネルトーク、ゲームなどを楽しみながら交流するイベントです。今年は10月3日(土)に、リーブラホールで開催する予定です。当日の参加は老若男女を問いませんので、どうぞご出席ください。

<UNESCO ユース・フォーラム in みなと 2015>・・・吉原浩昌 副委員長

私は昨年6月に入会しました。入会直後から、10月の「UNESCO ユース・フォーラム in 2014」の準備に参加してもらいました。今年も、ユネスコ活動をしている他の大学生や青年たちと一緒に、いかにして仲間に参加してもらうか、どのような企画がいいかを考え、準備をすすめます。自分の役割を果たせる喜びを感じ、励んでいます。

◎会員開発委員会・・・小林敬幸 委員長

会員同士の親睦を深め、気持ちの通い合う活動を促進するために、協会内部へ向けての事業を行っています。

<新入会員を囲む会> <MUAサロン> <新年会員懇親会> <大使館訪問>の4事業を担当しています。

以上のように、それぞれの委員会の魅力、活動のやりがいなどが紹介されました。

明日からでも参加して協力して欲しい、という熱意溢れる気持ちが漲っていました。

まずは、いくつかの委員会や事業に参加してみてください。その中で、興味のあるジャンルを見つけていただくのが良いように思います。



第2部 懇親会 (同じフロアにある港ユネスコ協会事務局にて)

友金 守理事の挨拶の後、軽食を取りながら全員の自己紹介が始まりました。ご自分の参加や入会したきっかけ、これからの意気込みなどを話すことで、和気あいあいの雰囲気広がりました。

「港ユネスコで自由に楽しくスキル、タレントを発揮してください。何でもできる組織ですので、一緒に仲良くやっていきましょう。」と先輩会員から、ほんわかと、かつ、力をこめて、委員会への参加のお誘いがありました。

新会員からも積極的な質問をいろいろいただき、初めて会ったとは思えない打ち解けた会となりました。「まずは参加を」をテーマにして、明日につながる有意義な会となりました。

今回やむを得ず欠席された方、ブレティンを読まれた皆さまで、活動内容などもっと知りたいとか、ご興味やご質問がありましたら、何なりとお問い合わせください。ご連絡をお待ちしています。

会員開発委員会 委員長 小林 敬幸



2015 年度第一回 国際理解講演会

日時：2015 年 6 月 26 日(金) 午後 6 時 30 分～8 時 30 分

会場：港区立生涯学習センター3 階 305 号室

戦後 70 年 歴史和解への道

講師：松尾 文夫（まつお ふみお）氏

ジャーナリスト



講師プロフィール

1933 年東京都生まれ。学習院大学卒業。

共同通信入社後、ニューヨーク、ワシントン特派員、バンコク支局長、ワシントン支局長、論説委員、共同通信マーケティング社長などを歴任。

2002 年、ジャーナリストに現役復帰。

著書：「銃を持つ民主主義—アメリカという国のなりたち」

（小学館文庫、第 52 回日本エッセイストクラブ賞受賞）、

：「オバマ大統領が広島に献花する日—相互献花外交が

歴史和解の道をひらく」（小学館新書）他、多数

最初に、松本洋港ユネスコ副会長が講師の略歴紹介を行った。

副会長か、とりわけ強調されたのは、80 歳と超えて未だに生涯現役新聞記者を続けている松尾文夫が、1971 年に米中和解を予測した事実である。日本中があっと驚いたあのニクソン米大統領の訪中と毛沢東との握手を、なぜ松尾氏が予測出来たのか？聴衆の興味が高まった。

講演内容

（1）日米同盟

* 日本は米国というものをきちんと学んでいないのではないかと。明治維新において日本がモデルと仰いだのは主として欧州の国々であった。野球の導入は早かったものの（1903 年には早慶戦）、米国についての正式の講座が東大で始まったのは 1923 年である。

信じられないことに、日本は米国に石油の 80% を依存しながら戦争を始めた。建国時から銃を持って戦った米国というものを理解せず、米国は「烏合の衆」であるから一撃を与えれば日本の言い分が通るとした。

現在、日米は同盟国とはいえ、お互いの理解にはまだ問題がある。

歴史和解の儀式もいまだに出来ていない。私は 1995 年 2 月 14 日、「ドレスデンの和解」のニュースに接して大きなショックを受けた。ドレスデンとは、米英旧連合軍によって夜間無差別焼夷弾爆撃を受けた都市である。ここで爆撃 50 周年の手厚い鎮魂の儀式が行われ、イギリス、アメリカの制服組トップと大使が友人として出席する中、ドイツ大統領が「和解」を宣言する格調高い演説を行った。

私は 2005 年以降、「ドレスデンの和解」日本版を提案している。相互献花による信頼醸成外交の提案である。

* 日本はあの戦争責任を自ら裁いていない。ドイツにはナチス犯罪追及のシステムがあり、今でも追及の手を止めていない。日本でも日本人の手による戦争責任を追及する動きがなかった訳ではない。東久邇内閣および幣原内閣時代に自主裁判開始の動きがあったが、マッカーサー將軍率いる総司令部の反対によって日の目を見なかった。

* 米国の Occupation Forces は、日本で「進駐軍」と呼ばれた。米国の知日派の人々にこの話をすると、かなり日本語の達者な方でも「知らなかった」という反応が返ってくる。私の恩師である松本重治氏（元港ユネスコ協会顧問）が「占領軍」と呼ぶべきだとの記事を書いたら、総司令部の検閲でカットされたと聞く。

(2) 中国、韓国との関係

* 安倍首相の今回の訪米は上下院合同会議において英語で演説し、外交努力の跡を見せたが、「歴史問題」は積み残した。

米国の建国の発端は税金問題、つまり反税闘争だった。米国は多民族国家である。住民の人種構成を見ると、1番多いのは白人であり、次いでヒスパニック、黒人、そしてアジア・太平洋系と続く。日本もこの中に入るアジア系市民は、10年前に比べると、急激に増加している。とりわけ中国系、韓国系は成功者が多く、政治に活発に参加している。従軍慰安婦の像建立は韓国系市民による活動の一つの例である。

* 私は小学6年生の時(1945年7月19日夜)、福井市においてB29の爆撃を体験した。

クラスター爆弾の親爆弾が欠陥製品で爆発しなかったお蔭で命拾いした。広島、長崎を含め、全国で命を落とした民間人は51万人と言われる。

2015年5月、核拡散防止条約(NPT)会議がニューヨークで開かれ、岸田外相が「広島・長崎訪問」を提案したが、中国大使は明確に反対を表明した。NPT会議は最終文書を出すことが出来ずに終わった。

「明治日本の産業革命遺産」について、韓国が反発している。日本は1854年、黒船来航により開国し、米国との付き合いが始まった。しかし、中国は1784年に米国と貿易を開始、日米より長い関係を築いていた。例えば幕末の日本に影響を与えた「海国図志」は、中国からの輸入だった。

中国、韓国との関係を考えるとき、もし私が中国に生まれていたら、韓国に生まれていたら、という見方をしてみてもどうか。

(3) 安倍外交のチャンス

* 2015年6月23日付朝日新聞朝刊にアマコスト元米国大使のインタビュー記事が掲載された。「嘉手納の米国空軍の存在は重要だが、辺野古への基地移行計画には疑問が残る」と述べている。米国内にこのような意見があることに注目したい。

* 沖縄の「万国津梁の精神」を生かす道を探りたい。「船を万国の架け橋として貿易を行う」という意味である。沖縄は武装しない国として貿易で栄えた。黒船に乗って来航したペリーの碑が沖縄にあり、「アメリカと沖縄は永遠の友人である」と刻まれている。

質疑応答

Q1:「日本はサンフランシスコ条約等を通じて謝罪と補償を実行したが、ドイツは国として謝罪していない」と主張している人がいるが。

A: その意見については承知していないが、ドイツは国として補償したと考える。例えば日本では、東京大空襲で死亡・負傷した民間人・遺族に補償していない。ドイツでは申し出があれば怪我に対しても補償してきている。

ゲルニカでは、大統領のサイン入りの謝罪文を見た。サンフランシスコ条約には中国、韓国は参加せず、冷戦構造の中で結ばれた条約として再解釈を求める学者もいる。

Q2: 日本人は自らを裁けるのか? 裁くつもりはあるのか?

A: 実際にそういう動きがあった。基本的に、裁くことは可能だと考える。

Q3: 今の政治状況を見ていると不安に駆られるが。

A: ご質問への回答に代えて、ご紹介したい記事がある。6月13日の読売新聞に、中曽根氏のインタビュー記事が出ている。参照して頂きたい。

ちなみに、日米安保条約や米軍の沖縄駐留は、中国も韓国も、北朝鮮も受け入れている。日本の軍国主義化防止に役立つと考えるからだ。最大のアイロニーではないか。(次ページに続く)



Q4：天皇・皇后両陛下が戦争犠牲者の慰霊の旅をなさっている。心が休まる。

A：同意見です。

Q5：軍国主義の復活を懸念するという話が出た。日本の外側から見る日本人の形質とは？

A：日本発のニュースの重要性は減っており、発信も少ない。米国にいと、日々のニュースは China、China である。しかし日本の Revisionist に対する懸念はあると感じる。とりわけ若い人には、ネットだけでなく新聞も読んで、事実関係を勉強して欲しい。

追記

この講演会は港区の動画配信事業の対象となった。当日は広報担当チームが来場してビデオ撮影を行った。動画は、港区のホームページ・「生涯学習講座」をご覧ください。

国際学術文化委員会担当常任理事 宮下ゆかり



ゆかた着付け体験教室

日時：2015年7月4日（土）13：30～16：00

会場：港区立麻布区民センター第一和室



参加者：外国人 16名 インドネシア、韓国、マレーシア、
ポーランド、ベトナム、中国、カンボジア
日本人参加者：4名 協会スタッフ：10名

- 企画内容
- 1) ゆかたの歴史の説明
 - 2) ゆかたの着付け練習
 - 3) ゆかたを自分で着た後写真撮影
 - 4) 参加者同士の自己紹介



参加者の感想をご紹介します。

☆とても楽しかった。

☆ゆかたを着て銀座に行きたい。

☆着付けを覚えたので、明日、子供にゆかたを着せてあげます。

☆外国の方の参加が多いので驚きました。嬉しいです。

ゆかたを着て、皆さんがそれぞれに写真を撮り合ったりしながら、和気あいあいと、楽しい時間を過ごすことができました。

伝統的な柄から超モダン柄まで。多様な色彩。帯との組み合わせによって、多様性が倍加されます。身につけるやいなや、日本の伝統を体感できるゆかた。手軽ながら、華やかな魅力に、感心します。

日本文化体験教室委員会 担当常任理事
平方一代



アルバニアの家庭料理

日時：2015年6月6日（土）12：00～15：30

会場：港区立男女平等参画センター「リーブラ」料理室（みなとパーク芝浦2階）

講師 レコ・ティダ大使夫人

駐日アルバニア共和国大使館 全権特命大使夫人

講師紹介 アルバニアのコルチャ出身、ティラナ大学卒業。
1995年化学者のご主人東北大学留学に同行3年半仙台に滞在。
この間に日本語取得。2009年駐日アルバニア大使夫人として再来日
2012年には「日本語—アルバニア語辞書」を刊行されました。



アルバニア 東ヨーロッパのバルカン半島にある。北はモンテネグロ、東はマケドニア、コソボ、南はギリシャ、東はアドリア海に接している。歴史は古く古代ギリシャ時代から知られています。

最近では第二次世界大戦末期に、社会主義の体制になり、しばらくは鎖国状態だった。ベルリンの壁崩壊後 解放路線となり 1991年にアルバニア共和国となった。

アルバニア料理 その地歴からイタリア料理、トルコ料理の影響を受けている。特徴は、何ととってもスパイスとしてブラックペパーを用いて、たくさんの野菜をいただきます。

<メニュー>

①Speca megjizë（カッテージチーズとピーマン）ピーマンは炒め、チーズはヨーグルトからつくる。



②Patëllxhane të mbushura（ナスのひき肉詰め）たまねぎ、ひき肉、トマト、にんにくを、オリーブオイルで炒める。それをナスにつめてオーブンで焼く。

③Tavë peshku（魚の鍋焼き）今回はサケを使う。炒めたたまねぎとトマトを合わせて、ブラックペッパーや香辛料で味を調べ、オーブンで焼く。



④Flija e Kosovës（クレープを作り、生クリーム、バター、フェタチーズを塗って重ねオーブンで焼く。

おやつになります。

⑤Sallatë（サラダ）フェタチーズと、ベビーリーフ、トマト、ピーマン、キュウリ、イチゴなど盛りだくさんの野菜を、たっぷりに使う。オリーブオイル、ブラックペッパー、にんにくなどで味付ける。いいお味でした。



講師 ディダ・レコ大使夫人



母国は、体制も変わり鎖国時代も終わり 大変だったと思いますが、そのようなことは微塵も感じさせず明るくきれいなお声でたいへん流暢な日本語で調理を教えてくださいました。海を挟んでイタリアと向かいあっているの

で、国民の多くがイタリア語が堪能だそうです。

料理にもイタリアの味が入り入れられているように思います。



会場は今回からは、昨年12月開館された「みなとパーク芝」内の男女平等参画センター・料理室を使うことになりました。新しく、きれいですが、調理台が今までより少なく、参加募集人員は20名となりました。

この料理教室の様子は 港区公報トピクス 2015年7月1日号の、you tubeの動画で見ることができます。

第2次世界大戦後の国連 UNESCO の誕生と、戦後 70 年

都立三田高等学校 ユネスコ委員会の皆さん と話しました

2015年6月11日(木)16:00~17:00 / 6月16日(火)16:00~17:00

都立三田高等学校のユネスコ委員会の生徒さん 30 名が、藤村由夏先生と川口直弘先生の引率のもと、2 グループに分かれて事務局に来てくださいました。来室いただくのは今年で 4 年目になります。

都立三田高等学校は都内に 6 校ある高校ユネスコ・スクールの 1 つです。

今年は、戦後 70 年にあたりますので、戦争に関係づけてお話しさせていただくことにしました。

前半は、日本ユネスコ協会連盟が発行した「一人ひとりが、明日のために」という小冊子をテキストにし、国連の UNESCO の誕生の経緯から説明いたしました。

— UNESCO は、第 2 次世界大戦の反省から、「二度と戦争を繰り返さない」という決意と理念を持って、1946 年 11 月 4 日、国際連合の専門機関として誕生した。



翌 1947 年、日本はまだ国連加盟が許されていない時期。UNESCO の理念に共鳴した仙台やの京都の市民が、世界に先駆けて、自発的にユネスコ運動を始め、日本中に広がった。これが評価され、日本は 1951 年 7 月 UNESCO への加盟が認められ、国際社会への復帰の契機となった。

5 年後の 1956 年 12 月、日本は国連への念願の加盟が承認された。

今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発などの様々な問題がある。世界や社会の課題を、自らの問題と捉えて、身近なところから取り組むことで、解決に結びつながるような新たな価値観や行動を生み出していく。そして、持続可能な社会を創造していく。多くのことが若い方がたに課せられ、期待されている。

世界には、貧困や戦争などが原因で、学びたくても学べない大勢の人がいる。平和や幸福の基礎となるのが教育。「ユネスコ世界寺子屋運動」という名称の、民間の教育支援活動に協力している。—

後半は、「戦後 70 年」といってもピンとこない高校生の方々に、5 歳の時敗戦をむかえた私個人のことを、戦争と貧困の時代を生き抜いた体験者の一人として、お話しさせていただきました。「戦後 70 年」が続いたのは、日本人が平和を守ろうと強く意識してきたからだとお伝えしたいと思いました。

— 父は昭和 18 年（1943 年）私が 3 歳の時、3 人の子供を残して、召集を受けて満州に出征した。終戦時、満州からソ連のシベリアへ抑留され、そこで没した。故郷和歌山市は、昭和 20 年 7 月、B29 の無差別爆撃により焼野原になり、8 月に敗戦をむかえた。子供には食べ物がなかったことが悲しかった。

世界規模で展開された戦争という狂気。300 万人以上の日本人が命を落とし、大勢が苦しみを味わった。しかも、アジア諸国の人々に、さらに甚大な被害や苦痛を与えた。決して忘れてはいけない、戦争の歴史や惨禍。—

拙い話ながら、聞いてくださる生徒さん方に励まされる気持ちで、ご一緒に時間を過ごさせていただきました。

2 週間後の 6 月末、生徒さんから感想文を送って下さいました。嬉しく読ませていただきました。

下記に、先生のお許しを得て、掲載させていただきます。

2 年 加藤彩さん

今回の港ユネスコ協会訪問を通して改めてユネスコの歴史を再確認することができました。都立高校の中でもとても珍しいユネスコ委員会に入ったので、これからは文化祭やその他の活動を通してできる限り多くの人にユネスコについて知ってもらえるような何か新しい活動をしていきたいと考えています。これから先の私の人生でもっとユネスコと関わっていききたいなと思いました。ありがとうございました。

2年 田村陽菜子さん

私は、今回港ユネスコ協会への訪問でお話しを聞かせていただいて一番印象に残ったのは戦争のお話です。

普段はあまり聞く機会のない実際に戦争を経験された話を聞いて改めて戦争はあってはならないものだなと思いました。戦争は勝っても負けても辛い思いをする人はたくさんでということ強く感じました。世界では戦争紛争がおこっている国がまだあるので、少しでも良くなってほしいと思いました。

今回学んだことを今後の三田高校ユネスコ委員会の活動に活かしていきたいです。

1年 出口和奏さん

今回は私たちのためにさまざまな準備をしていただきありがとうございました。大変貴重なお話ばかりでした。

ユネスコが第二次世界大戦の反省から誕生したという話は初めて知り、そんな昔からあるということに驚きました。そして私たちは当たり前のように毎日学校に通い勉強をしていますが、世界には約6700万人の子どもたちが学校に行けていないという現状を悲しく思いました。勉強できるのは当たり前ではないと思いました。

私は今回初めて戦争の話を生の声で聴きました。高井さんの言葉ひとつひとつは重みがあり、深く考えさせられました。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」まずは、みんなに知ってもらうことから、それが大切だと思いました。

私たちは、今回学んだことをみんなに知ってもらい、そしてみんなで考え、これからも活動していきたいと思えます。今回は本当にありがとうございました。

1年 熊谷優志さん

先日はお忙しい中、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

会長の高井さんご自身の戦争の辛い経験を聴き、改めて戦争はいけないということを学びました。

三田高校では1学年でユネスコ募金を行います。今年は「世界寺子屋運動」に募金することが決まりました。

貧しさや戦争などにより教育を受けられず、読み書きができず、結果的に安定した職業に就くことができずに貧困に陥るといった負のスパイラルにショックを受け、このテーマに決定しました。

私たちの力で少しでも多くの子どもが読み書きできるよう活動を続けていきたいと思っています。

以上



孫の世代にあたる高校生の方々とお話しする機会を与えていただけましたこと、先生方に感謝申し上げます。



「戦争そのものが悲惨であり、絶対悪です。」と、ある学者がテレビで話しておられました。

キラキラ輝く生徒さんがたに話を聞いてただけで、何か、あたたかい気持ちになりました。

これからの世界中がもっと平和で、幸せで、希望のあるものとなりますように、世界中のみなんで助け合って、築いて欲しいと願っております。

会長 高井光子

ユネスコ・スクール

日本がUNESCOに加盟したのは1951年。その2年後からユネスコ・スクールのプロジェクトが始まった。

2005年に「国連・持続可能な開発のための教育の10年」が始まったのを機に、文部科学省がユネスコ・スクールをESD（Education for Sustainable Development）の推進拠点と位置付けた。このことによって、2008年まで全国に24校しかなかったユネスコ・スクールは、加盟校が飛躍的に増加し、2015年5月時点で939校になった。

世界には182カ国に約10,000校のユネスコ・スクールが存在している。

原爆を危うく逃れた終戦の頃、そしてアメリカでの大学生生活

話者（会員）：田部（たなべ） 揆一郎さん

日時：7月14日（火）18：00～20：00

場所：生涯学習センター3F / 港ユネスコ協会事務局



今回の話者には田部さんをお願いいたしました。会員として、文化体験教室などで英語の通訳として活動して下さっています。

これまでの人生、特に、戦中・戦後の激動に振り回された子供時代、青春を謳歌したアメリカの大学生生活、日本の経済成長期の真っ只中で企業人として活躍されたご様子などを、お話しいただきました。

◇ **東京から広島へ疎開** 1938年昭和13年生まれですので、もうすぐ77歳になります。東京の世田谷に住んでいましたが、昭和19年、空襲が激しくなり、ひんぱんに防空壕へ逃げ込む状況になりましたので、会社員の父を東京に残して、母と妹と私は、父母の実家のある広島に疎開することになったのです。

◇ **満州（現・中国東北部）へ** 昭和20年の5月、東京で仕事をしていた父に満州転勤の話が出ました。父だけの赴任予定だったのですが、母が「家族も一緒に行こう」と決断。家族4人で一緒に満州へ渡ることになるのですが、その時期、渡航船は3隻のうち2隻は魚雷で沈没されるという状況だったと後で知りました。この満州行きは、まさに、運命の分かれ道でした。満州の最初の住まいは大連。その後、新京（後の長春）へ移り住む経験をしています。

◇ **終戦** 新京で8月15日を迎え、天皇陛下の玉音放送をラジオで聞いたことを覚えています。まだ小学1年生でしたので、「終戦」の意味がよくわかりませんでした。しかし、それを境に周辺の気配が急に変わってきたのを子供心に感じました。愛想の良かった街の人びとの表情が厳しくなり、略奪行為が増え、日本人学校は閉鎖されるという現実が見えてきたのです。

そのうち、毛沢東の率いる共産軍と、蒋介石の率いる国府軍の戦いが始まり、私たちの住居の中にも軍隊が入り込んできて、道を挟んで銃撃戦を始めました。私たちは地下室へ避難していました。「地上に出た時、銃弾がかすめた」と母が話したのを今でもゾッしながら思い出します。

蒋介石が台湾へ逃げた後、ロシア兵が侵攻。日本人男性の3人に1人を“クジ引き”で、シベリアへ強制労働に連行すると言うのです。私と同年代の子供を持つ、父と同じ会社の方は、不運にもクジに当たり、シベリアに連行され、そのまま帰らぬ人となったのです。幸いにも父はクジに当らず、家族一緒に帰ることができたのです。

引き揚げは、帰国を1年待ったのち、新京から大連の港町まで、屋根のない貨物列車で2・3日かけて移動しました。乾パンと、“アカザ”という雑草を茹でて食べたりもしました。女の子は髪を切って男の子のように見せるなど、どの親たちも大変な苦勞をしていました。

◇ **帰国の船、佐世保に上陸・・・広島へ、** 帰国の順番を待つようやく乗船でき、佐世保の港へ着きました。無事に家族4人揃って日本の土を踏むことができた幸運を感謝しました。

港ではDDT（除虫剤）の粉末を頭から服の中までたっぷり振りかけられたのち、暑い中を重い荷物を持って、いくつかの峠を越えて駅までたどり着きました。そこから窓のない真っ暗な貨物列車に乗って、父の兄の家族が住む広島に身を寄せました。伯父の家は「ひじ山」という山の影のおかげで、原爆の被爆を免れていたのです。少々のお米とサツマイモの多い食事でした。満州での激動を経験した後でしたので、そこでの生活は静かに感じました。その後の父ですが、後戦後の復興の仕事も活発になり一人先に東京へ移ることになったのです。

◇ **小学校、中・高等学校へ** 少し落ち着いてから、父の呼び寄せで、神奈川県葉山での小学校生活が始まりました。その後、逗子に移り、毎日、海水浴で真っ黒に日焼けし、健康優良児になりました。バナナの美味しさ、紙芝居で“紫頭巾”、“黄金バット”を遠くから眺めたこと、駅前のテレビで人だかりの中に混じって、大相撲観戦したことなど。戦後の何もなかった時代のことを思い出します。

昭和32年、カトリック系の男子校栄光学園の高校三年生の1月、商社マンの父にアメリカへの転勤の話が出て、家族揃って赴任することに私も賛同。それまで、当然のように、日本の大学へ進学するつもりだったのが、突然、方向転換して、アメリカの大学へ行く決心に繋がったのです。



◇ **アメリカへ、ニューヨーク大学へ** 昭和32年3月、プロペラ機で羽田から出発して、サンフランシスコを経てニューヨークへと無事に到着しました。カトリック系のフォード大学のプレップスクール（高校）に入学し、3月から9月まで英語の勉強に励みました。日本では栄光学園では神父の英語教育も受けていましたし、神奈川県弁論大会で優勝した経験があるなど、それなりの自信はあったのですが、やはり本場での英語には大苦戦しました。でも、数学に関しては、アメリカ人も取れないという100点満点を取るという嬉しい経験もありました。微分積分は日本の高校で習っていたから心に余裕があったからかもしれません。

エンジニアになるためMIT（マサチューセッツ工科大学）に入りたいと希望していました。そのために、秋にはMIT入学に繋がる教養課程を習得するために、ニューヨーク大学のエンジニアリング部門に入りました。必須の非技術系科目である文学・歴史の英語には随分苦労しました。分厚い本を読み、ディスカッションができるだけの力をつけようと頑張って勉強しました。そのお陰で、望みのMITへの転校が許可されるだけの成績を取り、教授の推薦状を貰うことができ、無事にMITの3年生に編入できました。

◇ **MIT（マサチューセッツ工科大学）へ** 3年生からは、テクニカル専攻となりケミカル・エンジニアリング（化学工学）に専念できることになったのです。日本人の学生の少ない時期、Mさんとの出会いがあり、食事したり語り合ったりした思い出があります。その頃、日本製品は「安かろう、悪かろう」といわれ、輸出力のない、経済力の乏しい時代で、日本人はとても肩身の狭い時代でした。アメリカ人はこの世の春のごとく輝いて見え、みじめさを味わった日々でした。そんな中、アメリカ人に勝つには「一にも二にも勉強しかない」と思い、日々励んだことを思い出します。4カ月続く夏休みには、1\$50¢のゴルフを楽しんだり、フロリダまでドライブしたり。友達との楽しい思い出が沢山あります。

◇ **卒業、就職・・・化学産業** 卒業にあたってアメリカの会社から月額21万円の提示がありました。しかし、日本に帰りたい一心で、給料は少なくとも日本の化学会社を希望して就職。時代は、経済の急拡大期に入り、化学業界もプラント建設のラッシュの時期でした。その後は、技術導入が盛んに行われた時代を経て、国産技術も向上し、成長期、そして成熟期を迎えるという一連の日本経済の流れを作り出すという経験もしました。

今日では、サウジアラビアなどの中東の圧倒的に安い原料価格に押されて、数量の多い汎用化学品からは手をひかざるを得なくなり、日本は付加価値の高いファインケミカル、薬品でないとやっていけない時代になっています。

私の戦後は、日本の化学産業、殊に石油化学の盛衰とともに生きてきた人生でもあったように思います。

◇ **これからの「英語教育」について** 「英語の勉強法」は、書かれたものを一生懸命に辞書を引いて読むことが大事です。辞書と首っ引きで読み進む、これが遠いようで近道ではないかと思えます。あとは、とにかく海外を知ること、旅行でもいいですから世界を見て欲しいと思えます。

「英語教育」については、若いうちから英語を勉強した方が良く、小学校からでも、とにかく早くから始めるのが良いと思えます。週に2回の2時間だけの英語教育で、日本語がダメになるとかということはないと思えます。

◇ **結び** 本日は、戦後70年の節目に、一人の戦争体験者である私に、お話しする貴重な場を与えていただいたことに感謝いたします。

現在は、港ユネスコ協会の「文化体験教室」で通訳をさせてもらったり、地域の人と「英語」の勉強をしたり、中学・高校へ出かけて行って実業界の苦労話を交えながら「国際社会に出て行って活躍するには・・・」とか、「英語の勉強法」とかというテーマで、私の経験をお話しています。

若い方に「戦争」をテーマにしたお話しもしていきたいと思えます。今後もユネスコ活動や地域活動に活かしていきたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。



拍手で閉会となりました。

4から5、6歳の頃の体験は、ご両親と一緒にあったとはいえ、死との隣りあわせの空襲、戦争中の満州への転居、生活の中に入り込んでくる銃撃戦、引揚げなど、戦争の怖さを直に体験された当時の恐怖は言葉以上のことだったと思えます。淡々とした語りの中に「戦争の悲惨さ」を感じたのは私だけではなかったと思えます。戦争は、様々な悲劇を生み出したのだと思えました。

氏の一筋の光明の運命が、アメリカでの勉学、そして戦後の復興の中で欠かせない国産技術・産業の発展へとつながっていったのだと思えました。貴重な体験談から、これからの世代の人々に向けて、英語教育のこと、もっと海外を見て世界を知るべきとのことなど、示唆に富むお話を多く伺うことができました。ありがとうございました。

会員開発委員会 委員長 小林 敬幸

事務局便り

【ようこそ 新入会員】 個人会員：運天選弥さん、近藤佐織さん、坂本直子さん、大谷陽子さん

【今後の行事予定】 (詳細は別途、チラシやホームページでご案内します)

☆9月2日～12月9日 英会話初級クラス、毎水曜日、18:30～20:30、コース全14回、

講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター

☆10月3日 (土) 13:00～16:40 「UNESCOユース・フォーラム in みなと 2015」

～つながり始める僕らのNew World～ (留学生の母国紹介、パネルトーク、ゲームなど)

会場：リーブラホール (みなとパーク芝浦 1階)

☆10月28日 (水) 18:30～20:30 第2回国際理解講演会 「日本の美の心 伊勢神宮式年遷宮を撮る」

会場：港区立麻布区民センター・ホール

講師：南川三治郎氏 (写真家 2015年度日本写真協会作家賞受賞)

☆11月3日 (火) 12:00～15:30 世界の味文化紹介 「リトアニアのクリスマス料理」

会場：港区立男女平等参画センター (リーブラ) ・料理室

講師：駐日リトアニア共和国大使夫人

☆11月7日 (土) 13:30～16:00 文化体験教室「沖縄民話とエーサー」

会場：港区立生涯学習センター1階 101号室

☆12月9日 (水) 18:00～20:00 「シンポジウム 気候変動時代の水害と水不足」

会場：港区立麻布区民センター・ホール

パネリスト：高橋裕氏 (東大名誉教授)、沖大幹氏 (東大教授)、森下郁子氏 (淡水生物研究所長)

☆12月12日 (土) 13:30～16:00 文化体験教室「書道」

会場：港区立生涯学習センター3階 304号室



【ご寄付、ご寄贈品など ご協力ありがとうございました】 ご寄付者お名前 (敬称略)

☆ネパール大地震緊急支援募金 合計10万円 日本ユネスコ協会連盟へ送金済み。

¥30,000/ 高井光子 ¥10,000/磯部豊子 ¥5,000/大塚多恵子・田部揆一郎・永井美智子・山田攝子・

佐藤美子 ¥3,000/上野圭子・笠原正子・土田元子 ¥2,000/アカーマン京子・今村孝子・永野博・菊地賢介・

小林敬幸 ¥1,500/坂下妥子 ¥1,000/秋山雅代・大崎マキ子・奥村和子・葛西章江・金澤由里・鈴木明美・

須田康司・富田晴雄・友金守・平方一代・山本俊介・渡部俊子 ¥2,500/第1回国際理解講演会会場他

☆ミンダナオ子ども図書館 送料 ¥5,000 永井美智子

【ご協力をお願い】 常時受け付け中です。事務局までお願いします。

*日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金

*ミンダナオ子ども図書館への寄贈品 (衣料品など：新品・中古品[洗濯済]、除・毛織物)。



【編集後記】

◆ 首相の戦後70年談話が内外の注目を集めた。そんな中で「私の戦後70年談話」なる本を手にした。昭和15年以前に生まれた各界で活躍する41人の方々の先の戦争での悲惨な経験と平和への思いを綴ったものである。個人的にはどの談話も戦争を肌で知らぬ国のトップによる政治的且つレトリックを駆使した談話に比して、格段に心の底にずしりと響いた。(須田康司)

◆ 6月下旬、米国の姉妹都市から9名の高校生が来日し、2週間の草の根交流を楽しんで無事帰国した。程なく、彼らの多くがFacebook上に、日本滞在中に撮った画像をUpしており、中には見ごたえのある短い旅行記ビデオに編集・制作したものもあることに気づいた。さすがデジタル時代の若者達はちがう、と感心するばかり。(棚橋征一)

◆ 新国立競技場のデザイン・建築費やエンブレムの問題で、東京2020オリンピック・パラリンピックの諸問題が浮びあがった。1964年のオリンピックの時は、みんなが前だけを向いて夢中になっていたように思う。先日、日本武道館の催しに出かけたが、エレベーターもエスカレーターもないという。建設された50年前は、障害者、高齢者の存在を意識さえしなかったのかと、あらためて時の流れを感じた。(高井光子)